

こだわりのリズムと身体的な拍節について

(神戸モーツァルト研究会 第202回例会)

野口秀夫

J・シュトラウス(父)作曲の『ラデツキー行進曲』にはいくつもの編曲版があるというが、O・アッカーマン指揮コロヌ管弦楽団によるレコードの演奏に使われている編曲は意表を衝いている。導入のファンファーレの終結部にある2つの四分休符を持って余したものが、2つ目に大太鼓の一撃を与えているのである^{譜例1}(これとよく似た状況が《魔笛》の二重唱「恋を知るほどのものには」の冒頭にある。モーツァルトが書き記した7つの八分休符を持って余した後世の誰かがクラリネットとホルンのアコードを挿入している)。

ホルン協奏曲 変ホ長調 K.495の第1楽章には独奏ホルンとヴァイオリンが二分音符で奏している間にヴィオラとバスが特徴的なリズムで応酬する部分がある。このリズムは擬音で表せば「コツン」と聞こえるようなものであり、楽曲構成上はあってもなくてもよい種類のものである。モーツァルトがこのリズム音型を何故取り入れたのかを考えてみるのも面白い^{譜例2}。ひとつの推測はビリヤードの球音の引用である。もともとショットした球はクッションに当たり反射したのち的球に当たりの球がそのままポケットに落下する音で終わるところであったが、このリズム音型により手球が的球に当たったのち別の球に当たってポケットするコンビネーションショット(あるいはキャノンショットあるいはキスショット)の技が披露されることになった。ポケット落下のあとにはトゥッティでやんやの喝采が控えているという趣向である。

交響曲 八長調 K.128のフィナーレのコーダには「ラソシド」の4音動機が出てくる^{譜例3}。一度知ってしまうと次からこの動機が出てくるのが待ち遠しくなってしまうがこの曲ではコーダになって初めて出てくる。焦らしのテクニックでもある。この音型はジュピター音型と同じく五線譜上で十字を描くが、繰り返しのセットで使われるのが特徴であり、そのため十字形というよりW字形というのが適切である。終止部に多いので「カシオペア終止形」という名前を付けておこう。なおハイドンの歌劇《月の世界》(1777)のBuonafedeのアリア“La ragazza col vecchione”やCeccoのアリア“Un avaro suda e pena”、グリエルミの歌劇La Quakera spiritosa用にハイドンが作曲したCardellinaの歌う挿入アリア“Vada adagio, Signorina”(1787)そしてカンタータ『哀れな民! 哀れな祖国! Miseri noi! Misera oartia!』(1790)のアリア“Funesto orror di morte”等にも出てくるのでモーツァルトのオリジナル音形ではない。

モーツァルトのオペラでは《魔笛》第1幕「夜の女王のアリア」^{譜例4}や《ルーチオ・シッラ》第2幕シッラのアリア^{譜例5}ほかに使用例がある。歌唱の終結は最後のド音を必ず強拍で終止和音にする必要があるため、4拍子系で等音価の8音で構成する場合には第1音が弱拍とならざるを得ない。動機の第1音が弱拍であるというのは動機が持つ拍節と矛盾するのではないかと思われる。器楽曲である前述の交響曲では第1音が強拍となっているから歌唱が伴う場合のやむを得ない措置なのであろう。したがって歌い方としては強拍か弱拍かは気にしないでよいものと思われる。

バレエにおいてこの主題はどう扱われているであろうか。《レ・プティ・リアン》

K.299bのガヴォットを考察してみよう^{譜例6}。17小節目のアウトタクトから始まる上記の動機はスラーにより弱拍の第1音から主題が始まることを強調している。さらにこの曲全体を見ると弱拍には(鎖線で囲った)pianoばかりでなく(実線で囲った)forteをも配している。これらはバレエの所作を特徴付けているものと思われる。すなわちforteの場合は小節前半で跳び上がり後半で着地する(バレエでは跳び上がる時ではなく着地時にforteが与えられる)目的のものが含まれ、pianoの場合は主なる所作に踏み込む身体の前動作を整える目的のものが含まれているであろう(K.334のメヌエット冒頭のアウトタクトが身体の前動作をイメージしやすい)。

しかし問題となるのは、聞き慣れた「カシオペア音型(ここでは終止形ではない)」がスラーで括られた「ラソシドラソ・・・」のとおりには聞こえないことである。私には17小節目から始まる「ソーシードーラーソーレミドー」のフレーズcとして聞き取られる。その理由を考えてみると、この曲はヘ長調で始まっているが、この部分を聞き慣れた八長調のメロディとして聞き取った、この部分が八長調となっていることは24小節目の終止音から見て確かに正しい、16小節目で転調の準備をしておりA音は両調性に共通の経過音となっている。ということは16小節目後半は主題の谷間であり、バレエ所作はpianoゆえ体勢を整える拍と考えられる。

同様に見ていくと主題aのアウトタクトは身体が所定の所作に至るpianoの前動作と考えられ問題ない。全楽器が奏し始める1小節目が主題の開始であるという解釈は主音が装飾音となることからありえない(Edition Eulenburgなどでは装飾音を書き下されてしまっているため分かりにくくなっている。また冒頭のpianoもforteとなっている)。主題b、dについてはforteで始まるアウトタクトが開始部である。主題eについてはアウトタクトがpianoであるため主題の開始のチェックには慎重を要する。ヘ長調であることは終結部で明らかゆえアウトタクトが開始部であると分かる。主題fについては難しい。そろそろ短調部分が欲しくなる頃合ゆえシャープが和声短調の二短調を示していると考えるのが妥当であろう。しかし、forteで奏される部分ではヘ長調に戻ることが強調される。このように短調fと長調fとが交互に出てきて最後はヘ長調で終止となるのである。

バレエ音楽はこのように聴いているだけではフレーズ解釈が一筋縄ではいかない。どうやらforteの場合はそこがフレーズ開始部分となりやすく、pianoの場合は調性のチェックがフレーズ開始部の決定に不可欠であるというということであろう。しかし、そのような分析をしないでもなんとなく聞き取れてしまっているというのが音楽の面白いところでもある。

なお、《レ・プティ・リアン》は自筆譜が残っていないためどのナンバーがモーツァルトの真作かははっきりしていない。このガヴォットは一応真作とされているが、上記の動機がモーツァルトの他の曲で馴染みがあるからという理由だけでは真作の証明にはならない。前述のとおり他の作曲家にも使用例があり、当時の常套句だったものであろう。むしろ扱い方が交響曲やアリアと異なる点の方がこの曲の場合特徴的であり、本当に真作であるならモーツァルトがフランス舞曲に精通した作曲家になりきっていたことを示している。

(2008年8月2日)

譜例 1 . J ・シュトラウス (父) : ラデツキー行進曲

Radetzky-Marsch

Johann Strauß (Vater)
opus 228

オット・アッカーマン指揮コロナ管弦楽団 (VOX 原盤) ではこの位置に大太鼓が！

譜例 2 . モーツァルト : ホルン協奏曲 変ホ長調 K.495 第 1 楽章

ショット音
クッション音
ホケット音

手球が的球に当たり、別の球にもう一度的球が当たった音

譜例 3 . 交響曲 八長調 K.128 フィナーレ

「ラ・ソ・シ・ド」の動機の繰り返しによるテーマのコーダであるが、終結和音を受け持っていない。このテーマが強起で出てきたこと、曲が器楽曲であることがその理由となっていると思われる。

譜例4 . 歌劇《魔笛》第1幕 夜の女王のアリア

Score for the Queen of the Night's aria, measures 83-98. The vocal line (Soprano) is circled in red, showing the lyrics: "auf e-wig dein, auf e-wig dein, auf e-wig". The piano accompaniment features a prominent rhythmic motif in the right hand, which is circled in blue. A callout box points to the vocal line, stating: "4つの音程動機の繰り返しは同じだが、歌唱の終結和音を受け持つためテーマは弱起とならざるを得ない。" (Although the four melodic motifs are repeated in the same way, the theme must start on a weak beat because the vocal line has to take the concluding chord.)

譜例5 . 歌劇《ルーチオ・シッラ》第2幕 シッラのアリア

Score for the aria 'No. 13' in 'Lucio Silla', measures 72-77. The tempo is 'Allegro assai'. The score includes parts for Oboe I, Oboe II, Clarinet in B-flat, Bassoon, Flute I, Flute II, Violin I, Violin II, Viola, Cello, and Double Bass. The vocal line (Soprano) is circled in red, showing the lyrics: "era - del sa - ni - to, era - del sa - ni - to, era - del sa - ni - to". The piano accompaniment features a rhythmic motif in the right hand, which is circled in blue. A callout box points to the vocal line, stating: "繰り返しが多いがテーマが弱起であることは同左である。" (There are many repetitions, but the theme starts on a weak beat, just like in the previous example.)

譜例6 . バレエ音楽《レ・プティ・リアン》K.299b からガヴォット

Nº 12 Gavotte (Mozart)
Allegro

Oboe I, II
Clarinetto I, II in D/F
Fagotto I, II
Coro I, II in F/C
Violino I
Violino II
Viola
Violoncello
Basso

Musical score system 1, measures 14-17. The system consists of two systems of staves. The upper system has a vocal line and a piano accompaniment line. The lower system has a piano accompaniment line. A horizontal line labeled 'c' spans measures 14-15. Vertical lines labeled 'd' are placed at the beginning of measures 15, 16, and 17.

Musical score system 2, measures 18-21. The system consists of two systems of staves. The upper system has a vocal line and a piano accompaniment line. The lower system has a piano accompaniment line. A horizontal line labeled 'e' spans measures 18-19. A horizontal line labeled 'f' spans measures 20-21. Vertical dashed lines are placed at the beginning of measures 18, 19, 20, and 21.

Musical score system 3, measures 22-25. The system consists of two systems of staves. The upper system has a vocal line and a piano accompaniment line. The lower system has a piano accompaniment line. A horizontal line labeled 'd' spans measures 22-23. A horizontal line labeled 'e' spans measures 24-25. Vertical dashed lines are placed at the beginning of measures 22, 23, 24, and 25.

Musical score system 4, measures 26-29. The system consists of two systems of staves. The upper system has a vocal line and a piano accompaniment line. The lower system has a piano accompaniment line. A horizontal line labeled 'f' spans measures 26-27. A horizontal line labeled 'f'' spans measures 28-29. Vertical dashed lines are placed at the beginning of measures 26, 27, 28, and 29.

Musical score system 1, measures 58-63. The system consists of two systems of staves. The upper system has three staves: a treble clef staff with a melodic line, a grand staff (treble and bass clefs) with a rhythmic accompaniment, and a bass clef staff with a bass line. The lower system has four staves: a grand staff (treble and bass clefs) with a melodic line, a grand staff (treble and bass clefs) with a rhythmic accompaniment, and a bass clef staff with a bass line. The music is in 3/4 time and features a mix of eighth and sixteenth notes.

Musical score system 2, measures 64-69. The system consists of two systems of staves. The upper system has three staves: a treble clef staff with a melodic line, a grand staff (treble and bass clefs) with a rhythmic accompaniment, and a bass clef staff with a bass line. The lower system has four staves: a grand staff (treble and bass clefs) with a melodic line, a grand staff (treble and bass clefs) with a rhythmic accompaniment, and a bass clef staff with a bass line. The music is in 3/4 time and features a mix of eighth and sixteenth notes.

Musical score system 3, measures 70-75. The system consists of two systems of staves. The upper system has three staves: a treble clef staff with a melodic line, a grand staff (treble and bass clefs) with a rhythmic accompaniment, and a bass clef staff with a bass line. The lower system has four staves: a grand staff (treble and bass clefs) with a melodic line, a grand staff (treble and bass clefs) with a rhythmic accompaniment, and a bass clef staff with a bass line. The music is in 3/4 time and features a mix of eighth and sixteenth notes.

Musical score system 4, measures 76-81. The system consists of two systems of staves. The upper system has three staves: a treble clef staff with a melodic line, a grand staff (treble and bass clefs) with a rhythmic accompaniment, and a bass clef staff with a bass line. The lower system has four staves: a grand staff (treble and bass clefs) with a melodic line, a grand staff (treble and bass clefs) with a rhythmic accompaniment, and a bass clef staff with a bass line. The music is in 3/4 time and features a mix of eighth and sixteenth notes.